

図書だより

〈第10号〉

昭和59年1月10日
呉工業高等専門学校
図書委員会

“なぜ、古典なのか”

編集委員 やま さ き

文字を使用し始めてから現在に至るまではどのくらいの年月が過ぎたのだろうか。

人は何のために、文字を使って書物に記録する事を始めたのだろうか。

文字で記録する事により多くの情報が保存され、書物を通して多くの人々が時間や空間を越え情報の伝達ができる。これは、科学技術の情報に限らず、人の心までも伝えることができる。

古典といわれる文学は、昔の人の心を現代の我々に伝えてくれる。それは読書により可能となる。これらの本を読んで感じる事は、人の心は昔に比べほとんど変化していない事である。社会は進歩しても、人の心も一見変りそうであるが、本当の所は変わっていないはずである。だからこそ、古典文学が現在でもなお多くの人々が推め、また多くの人々に読まれているのである。

学生諸君、ぜひ文学書を読み、その中の多くの心と交流してみてください。本は図書室にありますから。

「どくとるマンボウ

航海記」(北 杜夫)

1M 森 本 信 宏

まず、この本には、というより北杜夫さんには感服した。「航海記」でありながら、最初にマダガスカル島の神アタオコロイノナ、最後にウミボウズ、中に入るとヒョウタンツギからマサカアカツカチハヤピアメノオシホミミノミコトまで世界各地の妖怪・化物・神・幽霊が、あるようでない脈絡によって登場しているのである。

誤解のないように書いておくが、この本はあくまで航海記であり、それゆえもっとまじめな話もたくさんあるが、僕はそんなところは問題にしていない。そして、著者いわく、「私はこの本の中で、大切なこと、カンジンなことはすべて省略し、くだらぬこと、取るに足らぬこと、書いても書かなくても変わりはないが書かない方がいくらかマシなことだけを書くことにした。そのほうがわが潰瘍は機嫌がいいからである。」

と、このようなわけで僕はこの「どくとるマンボウ」が感服に価すると思っている。

マグロ漁船に乗り、まるで我々のためのように世界十カ所を失敗旅行してきたどくとるマンボウに僕は心だけで拍手を送りたい。

最後に、この話は、本当に北さんが漁業調査船照洋丸に乗って約半年の航海をしてきたものを書いた実話十αであることを書いておく。でないとうも誤解をまねきやすい。

そして、照洋丸よ、いつまでも。

「汽車旅12ヶ月」

(宮脇 俊三)

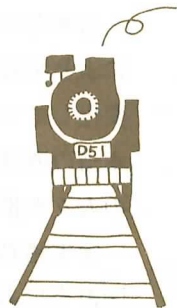
2E 桂 浩 了

これは、「汽車旅12ヶ月」の題の通り1~12月と序章、あわせて13の段落からなっていて、自分の体験したことなどを月別にしてまとめたものです。例えば、2月は山陰の旅行とそこで食べたカニの話、7月は北海道での失敗談などで、それぞれの段落に応じて地図

が書いてあったり、地元の人との話がのせてあったりして、とても読みやすい本でした。

この本の中で特に印象に残ったのは、11月の「上越線と陰陽の境」の話です。というのも、自分がこの夏に旅行へ行った時に上越線を通ったからです。この段落は表日本と裏日本が、分水嶺を境にしてどのようにちがうかを書いたものです。上越線で言うと、川端康成の「雪国」の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」で有名な清水トンネルがそれに相当します。自分が通った時には、あいにく夜中で景色もあまり見えませんでした、ちゃんと時間だけは計っておきました。呉線の呉トンネル(呉と阿賀の間にあるトンネル)は2分位かかりますが、この清水トンネルは6分54秒かかり、前後の小さなトンネルを合わせると約14分もかかり、改めて長いトンネルだと実感しました。当然、自分がこのトンネルを通過して見た表日本側も夜中でしたし、夏に行ったので表日本と裏日本のちがいはよくわかりませんでした、列車の乗客数からみればちがいはよくわかりました。自分の乗った北陸本線の富山発直江津行きの列車は電化はされていましたが、いまだに古い客車(こげ茶色でドアは走っている手で開けられる昔の客車)を使っている人影もまばらで、その次の直江津発新潟行きの列車は、夕方の7時ごろ乗ったせいか、一両当り4人位でしたが、表日本の群馬県の高崎あたりでは朝の7時前ごろにはほぼ満員の状態で、終点の上野あたりになると「すし詰め」の状態だったことを記憶しています。

話は変わって、この本を読んでいると改めて旅行はいいものだと思います。それは、例えば、学校などで××はこんなところだ、〇〇はどうだと、教えられているだけでは本当かどうかはわからないし、一度行った後にニュース、テレビなどである地名が出た時、そこに行ったことがあるか、ないかで、ずいぶん受け取り方がちがってくると思います。そして、土地の人の話で、ますます知識を豊富にすることができると思います。「百聞は一見に如かず」という、ことわざ通りです。すぐに「金がかかるから」と、金のことを持ち出しては旅行を避ける人もいますが、金がかかるだけの何かはあるのではないかと思います。



「ぜったい多数」

(曾野 綾子)

2C 坂本和則

「大学を出たばかりの暁子は、ひょんなことから青年社長の経営する歌声喫茶で働くことになる。平凡だが個性ある若者たちのなかで、暁子はしだいに人生の暗部にふれ真実にめざめてゆく……。都会の片隅に息づく現代日本の「ぜったい多数」である若い世代の明暗と哀歎に彩られた生活を、鮮やかに描きだして圧倒的な共感を呼ぶ青春小説。」

この文章は、この「ぜったい多数」の本のカバーに書いてあった紹介文である。自分が書く下手な紹介文よりは、よっぽど分かり易いと思う。以下、少し詳しく、内容を紹介しながら自分の感想も折り混ぜていきたいと思う。

まず、森暁子が大学を出て、故郷の広島県の三原へ帰ろうとするところから、物語は始まる。東京では、就職先が見つからなかったために、三原の商工会議所へ勤めようというのだ。そして、電車の待ち時間にピヤホールによったことで、エレベーターに閉じ込められる。そして、歌声喫茶「仲間」の社長、大滝と知り合い、そこに勤めることになる。そして暁子は、そこで働きながら、しだいに人生の裏側を経験していくことになる。

とまあ、こんな具合に物語は進んでいくのだが、ここでこの小説の舞台の時代の物価を書いとこう。なんと、この喫茶店の学生のアルバイトの日給が五百円、丸々働いても一万五千円にしかならない。現在では決して食べていけないのだが、小説の中では「決して食べられないという金額ではないが……」とある。ジュース1ぱい(喫茶店の)150円、東京から三原までの二等料金が「1480円」これらをもて、この小説の舞台が現在とはちょっとずれていることがわかる。ちなみにこの本の初版出版は昭和46年である。

話がずいぶん関係のない所へ行ってしまったが、この本のタイトルである、「ぜったい多数」というのは何を意味しているのだろうか。世の中で「ぜったい多数」であるものは何なのか、それは僕らのような庶民であると思う。

ここで暁子の友人である、阿高賢三の言葉を引用し

てみる。

「僕なんか、学生と名のつく連中の中のレッキとした庶民さ。ぜったい多数の白い金魚なんだ。それでもなお、自分の生活にそんなに絶望しちゃいけないんだ。学生になれない勤労青年だって、死ぬよりはましだと思ってる。おれのおやじもお袋も、誰も彼も大ていの人があつたよりはましだと思ってるんだ。それを忘れちゃいけないと思うよ。」

まさに「命あつての物種」的考え方で、ソクラテスは、反対するかも知れないけれど、そうそう、よりよく生きれないからといって死ぬわけにもいかない。要は、使用価値のない白い金魚でも、白い金魚であることを認識しないとイケない。つまり、人間にはだれにも、弱いところがあるが、その弱点を認めるとき初めて人は、人に対して、優しく、暖かくなれるのだ、ということだと思ふ。人はだれもが、自分の欠点なんか認めたくはないが、それでは、いつまでも進歩はない。特に、「ぜったい多数」である庶民は、連帯しなければ弱い存在に過ぎないと思ふ。

この小説の終わりでは、秋山という喫茶店のアルバイト学生が、癌であることが分り、もう手遅れになってしまう。秋山は、医師の友人の、奄美にある修道院へ行くことになる。この事件がこの小説を感動的に締めくくっている。まだ二十代で、この世を去らねばならなくなった青年と、その青年を悲しんで、心を痛める暁子の姿が、よく描かれている。暁子は、秋山のさそいもあつて、その修道院の学校の教師になる事になり、奄美に向かう。そして、飛行機にのる直前に、秋山の死を電報で知らされるのだ。

そして、この小説は幕を閉じるのだ。

この小説には、ノンフィクションや、推理小説のような派手さはないけど、人間味があると思う。読み終わって、人間って暖かいなあ、人の優しさっていいなあと思えるのだ。是非、他の人、特に若い人に読んでほしい作品だった。



「アンネの日記」

(アンネ・フランク)

3A 中岡久美子

私は、今まで、恥ずかしいことであるが、「アンネの日記」を読んだことがなかった。だいたいの筋書きは、知っていたというものの詳しい内容までは把握していなかった。

まず、最も強く感じ、考えさせられたことは、なぜユダヤ人である、というこのたった一つの事実のみで、一人の人間という存在とは違う、まるで、蚊かになかのように、殺されなければならなかったことである。人間には尊い生命というものがあり、これはどんなに優れた人であろうとも、その生命に傷をつけるということは、絶対に許すことの出来ない行為であると思う。まして、一度に数百万人という生命を奪ったヒトラー、及び、それをうのみにしていた国民は、何をその時考えていたのか、想像もつかない事実である。人間というもの、一つのことを熱中し始めると、そのことだけに気を取られ、後先構わず、行動してしまうという本能の下で、虐殺が行われたとすれば、人間とはなんて恐ろしい動物なのだろうと思う。しかし自分達は人間なのであり、この世界で一番高等な頭脳を持っている。これを、狂うことなく利用し、利己的な考え方を捨てることが出来れば、自然との調和も保つことが出来るのではないかと思います。

次に、アンネのまだ13歳から15歳という、一少女の目から見た、率直な意見に、心を引きつけられるものがあった。それは、現代の私達の生活からは考えることも出来ない、精神的、肉体的にも拘束された生活の上で、よりいっそう自分を、又周りの状況を見極めることが出来たのではないだろうか。隠れ家での生活は、克明に日記に記されているが、いつ見つかるかも知れない恐怖、外部の人と接することの出来ない孤独、貧しい生活の中で、少女は恋をし、大人達を批判し、自分を反省し、世の中を見つめた。アンネは、私達とは全く異なった環境にしながら、やはり私達と同じ一人の少女だったのである。恋のことなどは、なんとも鮮明に描写してあり、なんとなく笑みをこぼしながら、読んでいった。家族との関係も、全く納得のいく部分も多かった。私は、アンネのように、自分自身を第三者側から見つめることは、そんなに出来ない。まだま

だ経験不足であり、生と死の恐怖に立たされたこともない。なんとなく流されるままに生活している。しかし、時にはふっと、自分を見つめることがある。考えてみると、本当に情けなくなってしまうようなことが度々である。アンネのような強い精神力もない。しかし、彼女とて、欠点はあったはずである。彼女は、それを認め、反省し、このようなすばらしい日記を記したのである。私は、この日記を読みながら、自分のはんき過ぎたのではないかと、考えた。もう少し、自分自身を追いつめることも必要ではないかと、思った。

それから、大人への批判であるが、私達も今、大人でもない子供でもない中途半端な人間であるわけなのだが、大人というものは、常に子供の手本となるのである。子供というものは、大人を見て考え、自分への教訓としていくのである。私も、いずれ親になる時が来るだろうと思うが、今、感じたことを忘れず、良い大人になっていければ良いと思う。私は「アンネの日記」を読み終えて、二度と戦争はあってはいけないと思う。人種差別もである。しかし、今でも、やはり人種差別は残っており、多くの人々が、それによって苦しめられている。同じ一人の人間として、この世に生を受けた以上、みんな平等であり、平和な生活が送れるように、私達は努力していかなければいけないと思う。



読書論

4M 小田 浩

本を読むという事は、本来、楽しいものです。けれど楽しいというのは自分の意志により積極的に読書に取組んでいる場合であり、他の外からの要因により読まされるという事は苦痛以外の何ものでもありません。最近では、この苦痛の読書というものに会える機会が増えたために、楽しみの読書までもが私達の前から遠ざかっている様に見受けられます。ここでもう一度、本の持つ魅力について考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

本の魅力を一言で表せば“未知の世界の体験”でしょう。私達は現在、しかもこの場所にしか生きることができません。けれど本の中では時間も空間も飛越え、その中に生きることができます。それに加えて、昨日は農民、今日は国王、明日は流浪の民という具合に自分をも変えることができます。すなわち様々な人生を味わってみることが読書により可能となるのです。これは私達の人生が^{ただひと}唯一つであることを考えると、とてもありがたいものです。数多くの生き方の中から自分に適したものを選ぶのは、大変難しい問題ですが、読書によって体験したものが多ければ、とても心強いものです。

読書はまた、人との出会いの様なものでもあります。その人から、どの様な面白い話や、ためになる知識を得られるかは全くわかりません。もしかすると、大変な悪友となるかもしれませんし、大親友となるかもしれません。

私達のまわりには、初対面の人とでもスムーズに友人関係をつくっていく素晴らしい人が何人かあります。彼らは数多くの人々と接して話合い、観察することで、人々の心までも見透す事ができます。本についても同様です。読んだ量が多い程、「人を観る目」ならぬ「本を観る目」ができてきます。と同時に本の友人も数多くできるでしょう。

以上、述べてきた様に、本を読むという事は私達の心に肉付けし、幅を広くするという、極めて重要な、且つ魅力ある精神活動と言えます。

一昔前までなら、本さえ読んでいれば実りある豊かな人生を送れたことと思います。けれど現在では、そ

れは疑問です。何故でしょう。それは読書のあり方や、位置付けに改革が必要であるからです。文字だけでは情報が得られなかった時代から、今では音声や映像によっても知識を得られる時代になっています。これらを活用してこそ、より深みのある思考ができ、読書の器もより大きくなるのです。殊に精神活動というものを文化的なものだけに絞った場合、この効果は、測り知る事のできない程、大きなものとなるでしょう。具体的に述べるなら、あのエミリー・ブロンテの名作「嵐ヶ丘」を本で読み、映画を観て、その音楽をじっくり聴いてみると、本で読んだだけの時より、もっと大きな感動があり、キャシーやヒースクリフの存在が強い衝撃を伴ってぶつかってくることでしょう。

これからの読書というものは映像や音声との競争でなく、共存でなければなりません。これが楽しみの読書の輪を広げ、本の持つ本来の魅力を十二分に引出す手段なのです。

みなさん、もっと本を楽しみましょう。



「知的読書術」

(岩崎 隆治)

校長 西 正 任

著者名、発行所何れも余り聞かない名であるが、書名にひかれて読んでみた。内容の概略を記し、終りに感想を述べさせて頂いた。

第1部 読書の技術

第1章 なんのために本を読むのか。

読書というと、すぐに教養とか修養という言葉を思

い出す人が多い。それもとくに年配の人に多い。趣味は読書ですというとか何か高尚なイメージがする。しかし、読書はその目的から大別すると、(1)教養のための読書、(2)情報のための読書、(3)娯楽のための読書の三つに要約される。これまで著名人の書かれた読書論は教養派の系譜をひくものが多く、読書は人格を高め、心を豊かにするため、即ち人間形成のための精神の糧であると書かれている。この考え方では(3)の娯楽としての読書は、読書としての席を与えられない。(2)情報のための読書は、今日のような情報化時代になって、読書はなにをかを知るため、何かをするため、また考えるための手段であると書いてある。

第2章 読書は手段、書物は道具

この書物＝道具説は既に、哲学者西田幾太郎、田中美知太郎さん等によって提唱され、仕事を中心に考えるなら、書物は道具であって、自分の都合のよいように自由に利用すべきである。しかし、有効に利用するためには、既に多くを読んでいなければならない。道具の前でおじぎをするな、自分の道具は自分で揃える、手許におかないと使えるかどうかわからない、など何れも書物＝道具という考え方である。

第3章 上手な本の見つけ方、選び方

現代は本の洪水だ。今わが国に流通している本だけでもおよそ20万点、毎年の新刊書も2万冊を越える。この中から年間読める数十冊の本の選択はかなりむづかしい。本に関する情報を如何にして入手するか。出版社のPR誌、必読書のリスト、読書のエッセイ集、入門書ガイドブック、新聞や雑誌の書評欄等、詳しく文献をあげて説明し、要は、自分の本は足で稼いで肌で探せと結んである。

第4章 上手な本の買い方 (略)

第5章 いつ、どこで読むか。

忙しい人ほどよく本を読む。よく忙しくて、本が読めないと嘆く人がいる。しかし、定年で第一線を退いた人たちも暇になったら、かえって本を読まなくなると反省している人もいる。読書の時間が無いと言うのは、読書しないための口実にすぎない。(三木 清)。いつも何冊かの本を持ち歩き、ちょっとした空き時間を利用する。通勤電車は動く書斎であると考えよ。満員電車の中で本を読む方法、通勤による1時間読書法、新幹線による3時間(東京⇄大阪)読書法等について、読む本の選択とともに紹介してある。

第6章 どんな読み方をするか。

読書の先輩たちの中には、「少く読んで、多くを考える」(寺田寅彦)ことをすすめる人が多い。しかし、今日のような情報化社会では、常に時代の変化に対応するためには、「多く読んで、多く考える」方式でいかざるを得ない。多読の効果について、次のように書いてある。多読により、先ず自分が何に関心があるかを知ることができる。次に、多く読んだ中から、生涯伴侶とすべき良書を選ぶことができる。また、多読により、さまざまなものの見方を知り、視野を広げることができる。できれば、速く読む技術を身につけるよう訓練することも必要である。速読といえば、政治家、企業のトップの人達ははこの技術を身につけているようである。

第2部 読書の整理学

第1章 本への働きかけ方

作家や研究者の読書に関する本やエッセイによると、本に線を引いたり、書きこみをしている人達が案外に多い。これは、内容を自分のものにしたい欲求の現れであり、興味のある所、感動した所、大事な所に赤線のアンダーラインを引く人は多い。

第2章 本に線や記号を書き込む。

線の色や記号で内容を識別する。赤鉛筆は目立つが、目には青色鉛筆がよい。また若者は黄色鉛筆が好きで、アメリカの学生は、小学校のときから、大切な箇所が黄色く塗りつぶされて印刷された教科書を見なれているので、黄色いマジックペンを使う。記号についても色々な種類を例示してある。

第3章 本をノート代りにする。

本をノート代りに使うのは、心理的に抵抗を示す人が多い。しかし、本の要点を1頁毎に余白に記入し、さらに、読書感、アイデア、ヒントも遠慮なく記入して本をノート代りに使うといかに便利か、例をあげて紹介してあり、ポータブルの頭脳バンクと著者は敢えて推奨している。研究家の場合、文献のコピーの余白、裏面を利用して、書物兼ノートブックを作成し、活用している人が多い。

第4章 読書ノートをつくる。

本の中の感心した所をノートに写し取るのは手間のかかる不経済な作業のようだが、内容を正しく理解できるだけでなく、文章の上達にも役立つと英文学者福原麟太郎さんは言っている。いちいち手で写すのは面倒だから、コピーしたものを切り貼りしたらとも思うが、これだと頭に残るものが浅い。書き写すことが

記憶の強化になるようである。ノートの代わりにメモ用紙、カードを使用する人もあり、それぞれの利点について、例をあげて紹介してある。

第5章 あなたはノート派かカード派か。(略)

第6章 読書カードのつくり方 (略)

第7章 読書日記のすすめ

今は亡き文芸評論家の亀井勝一郎さんは「私は読書の中でとくに大切なのは、読書日記をつけることである。一つは、ある本を読んで感動した言葉に出会ったとき、それをノートに筆写する。筆写によって、はじめてその対象が消化され、自分自身の思考もうながされる。さらに、筆写した言葉についての感想、疑問、と同時に、その日に自分が経験したことや考えたことの片言隻句でもいい、書きつけておくこと。1日のうち30分でもよい。この二つの方法を続けて行ったら、あとから振り返ってみて、そこに歴然と自分の精神の成長の姿が浮び上ってくるはずである」と言っている。この読書日記法はいろいろの人がやっており、読書人生のポドメーター（歩数測定器）となると結んである。

以上、この本は公私ともに時間に追われがちなビジネスマンにとって、情報化時代、情報化社会において、いかに効果的に本を読み、知的財産を蓄積するかを著名人の読書術を例示しながら紹介している。確かに、企業人の時間に対する感覚は厳しく、企業の研究部門にいる友人達からしばしばそのことを聞き、それが今日の技術革新の先端に日本を位置づけている一つの要因でもあらうとも考えられる。

われわれの読書は、どちらかと言うと、本を大切に、ゆっくりと味いながら、良書を精読するよう習慣づけられてきたが、時代が変わり、社会情勢が変わって、本の洪水の中にいる今日において、本書に指摘されているような時間を大きな因子として含む読書術、能率的な整理の技術は、是非とも考えてみる必要性を感じる次第です。



拡がる世界

一般科目 周 藤 剛 士

中学生の頃、麻薬の恐ろしさを訴える短編映画を全校生徒で観たことがあった。20数年前のことなのだが、すでにその頃、今日と状況は異なるが、麻薬は人々を蝕んでいた。映画の後、担当の先生から感想を求められ、皆口々に恐ろしい、こわいと麻薬の恐ろしさを語っていた。先生はその時、麻薬がいかに容易に人間を廃人にしてしまうかを説明した後、なぜ映画で麻薬の恐ろしさを訴えるのか、その理由として、写真と音、つまり映画の持つ訴え、効果は活字のそれより優れているのだといった意味のことを話した。映画が余りにもショッキングであったため、私はその言葉を自然になるほどと受け入れていた。あれが映画でなくパンフレットか何かで読まされただけなら、これほど強烈な印象は受けなかったろうとも思った。と同時に私は漠然とだが、先生の話すすべては納得できないという思いを抱いていた。比較的ものを読むことが好きだったせいであろうか、映画以上の力を活字は持っているはずだというようなことを同時に心に思った。

映像と音の与える印象は確かに鮮明で具体的で、強く、感動的である。数々の名作と言われる映画や音楽やドラマがそれを証明している。

私はここで映像と音と活字の効果について比較するつもりはないし、又それは容易なことではない。ただ活字は活字独得の力を持っていることを言いたい。映画がそれこそ具体的な像で迫り、特定のイメージを与えるのに対し、活字は読む人の生き様を投影しながらさまざまに変身するものである。活字となったものの背後には作者が居て何かを主張し、何かを訴え何かを語ろうとしている。それは事実だ。しかし幸い活字はそれ自体映画のように具体的な色彩も像も持たない。読む側がその活字に、活字のまとまりに、色彩と像とさらに音を与えていくのである。読み手が勝手に作品に色を付けてゆくのである。そうなると読者はもはや作品を与えられる受身の立場ではなく、著者と一体となって活字作品を立体的に再創造する演出者であり、又創作者である。読書の面白さのひとつはここにあるのではなからうか。

私が子供の頃に繰り返し読んだ本に「15少年漂流記」

と「クオレ物語」がある。どちらも様々なタイプの少年が登場する。ある者はリーダーシップをとり、ある者はリーダーを助け、ある者は傍観者であり、ある者は非協力的であり実にヴァラエティに富んでいた。舞台は異なるがいずれも少年達の冒険や日常の生活がいきいきと描かれていた。私は少年一人一人の姿を勝手に思い描いた。勇敢な子にはきりっとひきしまった表情を、弱虫にはそれらしい情ない顔を。時にはそれが私自身になったり私の友人になったりした。そしてある時は親近感を覚えたり、ある時は反発したりして私は胸を踊らせて物語りを読んでいた。その時私は、別の新しい世界にいた。そしてそれはそのまま私の内なる世界として未だに残っている。高校時代には、ヘッセの「デミアン」やロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」などを熟読した。デミアンの姿もジャンの姿も今も脳裡に焼き付いている。当時はデミアンの魔力的な力をたたえた超人的な顔が見え、静かな澄んだ声が聞えた。ジャンの弾くピアノの音が聞えた。

活字に勝手に音と映像を与えながら私は自分の世界を少しづつ広げていったように思う。

私達には限られた時間と空間しか与えられていない。その制約の中で自分の世界を広げるのには我々に与えられた、想像し、かつ創造する能力を用いるしかない。活字はその能力を引き出してくれる有効なメディアであり、かつ広がる世界そのものである。

図書室の利用について

土木工学科 小堀 慈久

昨今の図書の増書、予算もある程度、満されつつある中で今少し、利用者及び貸出冊数等が少ないように思われる。学生としての特権である書籍及び図書室を大いに利用すべきである。広い意味での図書室の利用の仕方について思いつくまま2、3述べてみたい。工科系の学生は文学作品をあまり読まないと私自身も含めて、よく言われる。各自の趣味の相違と言えはそれまでであるが、今、思えばくやまれる事が多い。私達は多くの人の中で生きていく。もの見方、考え方は多くの人々の意見、その人の考え方から自己を見直し、見識が養われるのである。将来、社会生活をしていく上で、いわゆる大人社会で様々な人々と仕事をしてい

く上で重要な事柄となる。その意味で書物にはその人の考え方、社会的な物の見方がよく表わされている。とくに近代の著名な文学作品の中にその代表的なものが多いように思われる。又その人が読んだ書物からその人を知る事もある。作家の井上ひさしは自分の父を幼くして失った。母親に「父は？」と尋ねると部屋にあった膨大な蔵書を指し「これがあなたの父だ」と言われ、元来、本の好きな彼であったが、毎日のようにその蔵書を読み、しだいに父を知り、またその事を通して彼の生涯の道を決めようである。

次に図書室はまたとない自室となる。レポートや、原稿の作成は静かな落ち着いた場が必要となる。考えながら文章化していくと新たな思考が生まれる。自宅や、下宿、寮は他の生活者と共にいるので集中心がかけ、つい散漫になる。他の事や、手近かな本や物に手が出る。そのような心配は図書室にはない。目の前にある用紙と鉛筆だけが相手となれば時のたつのもつい忘れる。冬の暖房、夏の冷房と環境は抜群のものがある。県立図書館や市立図書館に行くと、高校生の室、小中学生の室、成人の室とそれぞれ分けてあり、それぞれ自分の勉強、原稿に打ち込んでいる。広大の工学部の図書館は個室も教室あり、学期末は盛況である。

近年、図書館のあり方に新しいものがあり単に書物のお倉、管理の域を越えて文献の情報、他の図書館との情報交換、特にT S S等端末による検索システム網が発達し、全国のおもな図書館（大学附属等の）と情報提供の会話などができるようになった。特に国立国会図書館等が全国の図書館とのセンターとなり、海外文献の情報交換も今や可能となり、世界の情報が瞬時にわかるようになった。自分が求めている文献がどこの国のどの図書館にあるというのがわかるとなれば大変な事である。かつては文献を挙げた著者に手紙を書く。外国であれば手紙の交換だけで3週間から1ヶ月は必要であった。またそれでも見つからない事もある。情報システムの進歩で教育や研究が時間的に量的に大いにやりやすくなり、又図書館の利用も向上して来たと思われる。この近くではやはり広大本部の図書館がこのシステムを利用している。民間ベースの情報網もあるが、文献を手にするのに経費の面で格段の差がある。その点で公共施設の利用をすすめる。以上、図書室の利用について乱文を顧みず雑感を述べてみた。





(西 正任)

書名	著者名	出版社名
図解分子の見方・考え方	吉弘 芳郎	オーム社
考える愉しさ	梅原 猛等	新潮社
独創に人あり	田原総一郎	新潮社
喫煙の医学	並木・平山	講談社
匠の時代	内橋 克人	講談社

(大林 潤)

書名	著者名	出版社名
こころ	夏目 漱石	新潮文庫他
高瀬舟	森 鷗外	〃
羅生門	芥川 龍之介	〃
老人と海	ヘミングウェイ	〃
車輪の下	ヘッセ	〃

(岩根 三邦)

書名	著者名	出版社名
禪に生きる	沢木 興道	誠信書房
思い出の記	徳富 健次郎	岩波文庫
死を見つめる心	岸本 英夫	講談社文庫
宿なし法句参	内山 興正	まみず新書
ルバイヤート	オマル・ハイヤム	岩波文庫
饗宴	プラトン	新潮文庫

(兼本 富夫)

書名	著者名	出版社名
罪と罰	ドストエフスキー	岩波文庫
車輪の下	ヘルマン・ヘッセ	〃
赤と黒	スタンダール	〃
ベスト	アルパール・カミュ	新潮文庫
人間の絆	サマセット・モーム	旺文社文庫
人間の条件	五味川 純平	文春文庫
こころ	夏目 漱石	岩波文庫
樅の木は残った	山本 周五郎	新潮文庫
宣告	加賀 乙彦	文芸春秋

(今井 勲)

書名	著者名	出版社名
冬の鷹	吉村 昭	新潮文庫

(岡中 正三)

書名	著者名	出版社名
こころ	夏目 漱石	新潮文庫他
二十四の瞳	壺井 栄	〃
次郎物語	下村 湖人	〃

(茶木 正吉)

書名	著者名	出版社名
公害の人間学	大木 幸介	講談社 (フルーバックス)
遺伝毒物	西岡 一	〃

(石井 淳二)

書名	著者名	出版社名
ヴェルレーヌ詩集	ヴェルレーヌ	
老人と海	ヘミングウェイ	新潮文庫他
旧約聖書		聖文舎

(川尻 武信)

書名	著者名	出版社名
ものの見方について	笠 信太郎	角川文庫
三四郎	夏目 漱石	岩波文庫他
アメリカ人	ヘンリー・ジェイムズ	河出書房新社
赤と黒	スタンダール	岩波文庫他

(白川 洋二)

書名	著者名	出版社名
どくとるマンボウ海記	北 杜夫	中央公論社
ことばと文化	鈴木 孝夫	岩波新書
肉食の思想	鯖田 豊之	中公新書
月と六ペンス	サマセット・モーム	世界文学全集
アラスカ物語	新田 次郎	新潮文庫
ウィリアム・ワーズ・ワース詩集	ワーズ・ワース	研究社



(田邊 達雄)

書名	著者名	出版社名
三太郎の日記	阿部 次郎	角川選書
亀井勝一郎全集	亀井 勝一郎	講談社
竜馬がゆく	司馬 遼太郎	文芸春秋社
徳川家康	山岡 荘八	講談社
漱石全集	夏目 漱石	岩波書店
デイビッド・コバークフィールド	C.デイケンズ	岩波文庫
魅せられたる魂	R.ロラン	河出書房新社
人間の絆	S.モーム	講談社文庫

(久保田 勲)

書名	著者名	出版社名
寺田寅彦随筆集	寺田 寅彦	岩波書店
火	熊谷 清一郎	岩波新書

(河口 勇治)

書名	著者名	出版社名
二十歳の原点	高野 悦子	新潮文庫

(河野 正来)

書名	著者名	出版社名
ロウソクの科学	ファラデー	講談社文庫
青春の蹉跎	石川 達三	新潮文庫
車輪の下	ヘルマン・ヘッセ	新潮文庫他

(山崎 勉)

書名	著者名	出版社名
人間にとって科学とはなにか	湯川 秀樹 梅棹 忠夫	中公新書
量子論	D.ボーム	みすず書房
菊と刀	R.ベネディクト	現代教養文庫
幸福論	B.ラッセル	講談社文庫
福翁自伝	福沢 諭吉	講談社文庫
草枕	夏目 漱石	岩波文庫他
雪国	川端 康成	新潮文庫
老人と海	ヘミングウェイ	旺文社文庫
復活	トルストイ	岩波文庫他

(清 和四士)

書名	著者名	出版社名
技術の哲学	戸坂 潤	
漱石全集(書簡集)	夏目 漱石	岩波書店
小泉信三全集	第21巻 編沢 諭吉	
ハイネ詩集		旺文社文庫

編集後記



第10号をお届けします。この度は、夏休みの課題読書感想文の優秀作を主に、高専祭の読書感想文コンクールの応募作品、弁論大会で最優秀賞を受賞した読書論等、学生諸君の充実した原稿を多く掲載しました。また、校長先生をはじめ諸先生方にも原稿、図書の推選等にご協力戴き有難うございました。学生に是非読ませたい基本図書の選定も、今回はそれらしいものが出来つつありますが、昨年比し、ご協力戴いた教官が減少し、残念に思っています。“もっと、学生に読書を”の図書委員会のキャンペーンも曲り角に来つつあるのかと反省している昨今です。

(兼本記)



新着図書案内

>0 総記<

文科学の時代 (藤井 康男) 福武書店
 先端社会 (増田 米二) T.B.S.ブリタニカ
 フォートランプログラミング (松本 欣二) 朝倉
 言葉とコンピューター (中原 紀) 工業調査会
 実用BASIC演習 (大西 正和) 日刊工業新聞社
 図書館用語辞典 (図書館問題研究会) 角川
 情報と文献の探索 (長澤 雅男) 丸善
 愛書家の散歩 (斎藤 夜居) 出版ニュース社
 世界大百科年鑑 1983 平凡社
 NHK海外シリーズ図書：キューバの素顔 日本放送出版協会

岩波クラシックス

35：正法眼蔵随聞記
 36：眠られぬ夜のために 1
 37： 〃 2
 38：日本民謡集
 39：旧約聖書ヨブ記
 40：モーツァルトの手紙 上
 41： 〃 下
 42：上田敏全訳詩集
 43：唐詩選 上
 44： 〃 中
 46：イソップ寓話集
 47：美味礼讃 上
 48： 〃 下

岩波グラフィックス

1：桂離宮
 2：プリマ誕生～森下洋子
 3：白サギの詩
 4：木曾路の三十年
 5：核戦略の結末
 6：瞬間を見る
 7：ヒロシマの証
 8：仏像～イコノグラフィ
 9：群となわばりの経済学
 10：歌舞伎再見
 11：生きていく地球
 12：私のシルクロード
 13：鉄の文明
 14：空からみる日本の地形
 15：ペルーの天野博物館
 16：新京都案内
 17：吉備路～古代史の風景

実戦的マイコン応用技術 (坂巻佳寿美) CQ出版社
 マイコン入門応用 (東京芝浦電気(株)半導体事業部)エレクトロニクスダイジェスト
 ロジックシーケンス入門 電気書院
 5語で動かすパソコン 基礎編 ダイヤモンド社
 BASIC VS FORTRAN77 プログラミング学習12週 (木戸 能史) オーム社
 初歩のコンピュータ読本 (徳野, 上谷) 〃
 問題解決のためのFORTRAN (加納, 西村, 原) 東洋経済新報社
 FORTRAN 基本+応用 (刀根 薫) 培風館
 情報処理演習 FORTRAN (奈良, 川添, 堀口) 〃
 読書家の新技術 (呉 智英) 情報センター出版局

>1 哲学<

世界の神話 筑摩
 6：インドの神話
 神々の記憶 (牧野 和春) 工作舎
 日本人の心情 (山折 哲雄) 日本放送出版協会
 心のたべもの (高橋 定男) 新時代社
 禁忌 伝統と現代社

>2 歴史<

わかりやすいソ連史 (中山 正暉) 日本工業新聞社
 アメリカこきおろ史 (ヨアヒム・フェルナウ) 新潮社
 古代インカ文明の謎 (ミロスラフ・スティングル) 佑学社
 ロロロ伝記叢書 理想社
 ショーペンハウアー
 アンデルセン
 人名よみかた辞典 姓の部, 名の部 日外アソシエーツ
 ネルンストの世界 (K.メンデルスゾーン) 岩波
 世界地理 12：両極・海洋 朝倉
 日本歴史地名大系 平凡社
 40：高知県の地名
 角川日本地名大辞典 27：大阪府 角川
 シルクロード ローマへの道 日本放送出版協会
 8：コーランの世界
 きみはヒロシマを見たか～広島原爆資料館～ (高橋 昭博) 〃
 攻める (武岡 淳彦) ビジネス社
 北京よさらば (周 令 飛) サンケイ出版
 さりりーまんて候 (童門 冬二) 日本経済新聞社
 一人旅の本 (長井 隆) 五月社
 邪馬台国 伝統と現代社
 ナンバー2の時代 (萩原 裕雄) 東京経済

各駅停車
11：群馬県
44：熊本県

河出書房新社

> 3 社会科学 <

北京の八〇〇日～ドキュメント中国事情～
(越石 建夫) 彩流社
ルポ・アメリカNOW 読売新聞社
世界の中の日本の役割～国際シンポジウム～
朝日新聞社
だまされる検事 (伊藤 栄樹) 立花書房
世界の水法～ヨーロッパ編～
(国際連合食料農業機関) ぎょうせい
現代の障害者福祉問題 (一番ヶ瀬康子) ドメス出版
生活学の提唱 (川添 登) 〃
人間の教育を考える 講談社
：教育とはなにか
：学校と教育方法
現代教育学シリーズ 有信堂高文社
2：教育社会学
9：日本の教育
人間発達の社会学 (高旗 正人) アカデミア出版会
授業のめざすもの (武藤 文夫) 黎明書房
学者の世界 (新堀 通也) 福村出版
大企業黒書 (「労働運動」編集部) 新日本出版社
先生聞いてくれ (久保田 聡) 民衆社
先生ノうそをつかないで
(群馬県教組桐生支部, 群馬の教育を語る会) 〃
1990年 日本のシナリオ (唐津 一) P H P 研究所
富士通のO A戦略 (工藤 秀幸) 青葉出版
新日本人は死んだ (M. トケイヤー) 日新報道

> 4 自然科学 <

科学史技術史事典 (伊藤俊太郎) 弘文堂
サイエンスライブラリ演習数学 サイエンス社
1：演習行列・微積分
2：演習線形代数
3：演習微分積分
4：演習微分方程式
5：演習関数論
現代確率論の基礎 (秋丸 春夫) オーム社



複素関数論とその応用 (W. R. デリック) 講談社
菌類図鑑 上, 下 (宇田川俊一) 〃
物理法則はいかにして発見されたか
(R. P. ファインマン) ダイヤモンド社

基礎物理学 2：熱学 東京大学出版会
オックスフォード物理学シリーズ 丸善
13：原子核と素粒子
物理学選書 裳華房

1：エレクトロニクスの基礎
物理教育覚え書き (原島 鮮)
大学演習一般物理学 (金原 寿郎) 〃
大学実習基礎物理学実験 (平田 森三) 〃
物理化学実験法 増補版 (鮫島実三郎) 〃
大学演習物理化学 (吉岡甲子郎) 〃
基礎生物学 増訂版 (佐藤 重平) 〃
生物の実験法 (石田, 佐藤) 〃
力学 1, 2 (原島 鮮) 〃
基礎物理学選書 〃

4：音と音波
12-A：電磁気学 1
12-B： 〃 2
18：熱学演習～熱力学～

フェルミ熱力学 (エンリコ・フェルミ) 三省堂
電磁気学入門 (原 康夫) 学術図書出版
原子物理学入門 (坂田 昌一) 勤草書房
星の一生 (森本 雅樹) 日本放送出版協会
宇宙を観る～GRAPHIC UNIVERSE～ 教育社
時の科学 (時研究会) コロナ社
防災地形 (水谷 武司) 古今書院
岩波生物学辞典 第3版 (山田 常雄) 岩波
大学課程数学演習シリーズ 共立出版
1：詳解代数・幾何演習
2：詳解微積分演習 1
3： 〃 2
4：詳解微分方程式演習
5：詳解ベクトルと行列演習

地球科学講座 4：海洋 〃
環境汚染と指標植物 (埜田 宏) 〃
原色日本地衣植物図鑑 (吉村 庸) 保育社
日本の植生図鑑 1, 2 (中西 哲) 〃
ビタミンCと健康 (村田 晃) 共立出版
自然保護の原点 (佐々木好之) 〃
物理学 One Point 〃
22：核 (西川 喜良)
23：電流と電気伝導 (黒沢 達美)
家畜になった日本人 (今野 道勝) 山と溪谷社
評価と数量化のはなし (大村 平) 日科技連
計算に強くなる本 (森谷 宣暉) 日本実業出版

いかにして問題をとくか (G. ポリア) 丸 善
 発見と創造 (W. I. B. ビヴァリッジ) 培 風 館
 コケの世界 (伊沢 正名) あかね書房

>5 工 学<

境界要素法～基礎と応用～ (田中 正隆) 丸 善
 信頼性工学入門 改訂3版 (塩見 弘) 〃
 構造物の信頼性解析 (A. R. ルジャーニツイン) 〃
 大学講義内燃機関 (木村 逸郎) 〃
 溶接工学の基礎 (溶接学会) 〃
 マイコンによる有限要素解析 (戸川 隼人) 培 風 館
 基礎電気回路 2 (末武 国弘) 〃
 温度センサ (二木, 村上) 日刊工業新聞社
 精密測定技術 (中野 幸久) 〃
 流量計測ハンドブック (川田 裕郎) 〃
 初級工業英語 (二反田鶴松) 〃
 技術英語入門 () 〃
 工業技術ライブラリー 〃
 15:ロータリーエンジン
 請負工事と積算入門 (木笹 郁) 〃
 仮想計算機入門 (宮田 英男) 〃
 浸炭焼入れの実際 (内藤 武志) 〃
 技術文化史12講 (下間 頼一) 森北出版
 システム制御工学 (平井 一正) 〃
 土木工学演習選書:演習水理学 〃
 防災シリーズ 〃
 2:埋立て軟弱地盤の防災
 新鉄道工学 (西亀 達夫) 〃
 消波構造物 (近藤, 竹田) 〃
 新しい機械工学 〃
 6:溶融加工
 新体系土木工学 技 報 堂
 1:数値計算法
 7:構造物の弾性解析
 54:地域計画 2
 地盤の掘削 (飯吉 精一) 〃
 吊橋の文化史 (川田 忠樹) 〃
 圧延による加工 (フリッツ, フィッシャー) 〃
 線形システム制御理論 (古田 勝久) 昭 晃 堂
 デジタルシステム制御 (成田誠之助) 〃
 最新電磁気学 (松原 正則) 〃
 集積回路基礎技術 (伊藤 糾次) 〃
 システム制御理論入門 (小郷, 美多) 実 教 出 版
 基礎通信工学 (小澤 慎治) 〃

精度の探究 (エヌ.イ.チュールン) コ ロ ナ 社
 標準機械工学講座 〃
 1:機械要素 1
 2: 〃 2 改訂
 標準機械工学例題演習シリーズ 〃
 8:伝熱工学例題演習 〃
 機械工学大系 〃
 43:鑄造工学
 新編機械工学講座 〃
 22:蒸気原動機
 ハカリの基礎理論とその応用 上 〃
 精密工学講座 〃
 8:精密測定学
 電子通信学会大学シリーズ 〃
 F・7:通信網工学
 F・8:電磁波工学
 電気・電子工学大系 〃
 18:機能デバイス
 標準電気工学講座 〃
 20:半導体素子 改訂版
 標準金属工学講座 〃
 16:腐食科学と防食技術 改訂版
 材料科学概説 (石井勇五郎) 朝 倉
 材料試験 (河本 実) 〃
 朝倉機械工学全書 〃
 17:蒸気原動機
 機械工学基礎シリーズ 〃
 11:エレクトロニクス入門
 機械工学基礎講座 〃
 15:応用弾性学
 電気工学事典 (宇都宮敏男) 〃
 電気工学基礎講座 〃
 9:電気材料および部品
 電気回路 (木戸, 山田) 〃
 土木工事の積算と実際 土 木 学 会
 国鉄建造物設計標準解説 〃
 :鋼鉄道橋, 鋼とコンクリートとの合成鉄道橋
 :鉄筋コンクリート構造物および無筋コンクリ
 ト構造物, プレストレストコンクリート鉄道橋
 BASIC [PC-1500] による土木技術者のための
 プログラム計算マニュアル pt. 1 pt. 2
 (佐藤 勝夫) 山 海 堂
 図解河川・ダム・砂防用語事典
 (土屋 昭彦) 〃
 S D 選書 鹿 島 出 版 会
 179:風土に生きる建築
 180:金沢の町家
 181:ジュゼッペ・テッラーニ

182：水のデザイン
 わかり易い機械講座 明 現 社
 ：冷凍および空気調和
 わかり易い電気講座
 ：電気・電子材料
 電気・電子材料 (石田 春雄) 共 立 出 版
 機械工学講座
 21：ガスタービンおよびジェットエンジン 改訂版
 材料力学と材料試験 (村田 憲治) 〃
 大学講座電子工学 〃
 ：現代回路解析
 トライボロジー概論 (木村 好次) 養 賢 堂
 金属の潤滑摩擦とその対策 (小川喜代一) 〃
 検図の工学 付録図 (22枚) (遠藤, 島田) 開 発 社
 カプラン水車の流れ (清水 孝) 〃
 油空圧便覧 (日本油空圧協会) オ ー ム 社
 現代電気・電子材料 (平井平八郎) 〃
 システム制御工学入門 (早勢 実) 〃
 アモルファス半導体の基礎 (田中 一宜) 〃
 電気百科事典 カラー版 〃
 総合エネルギー講座 (エネルギー変換懇話会) 〃
 1：エネルギー工学総論
 2：エネルギー基礎工学
 3：エネルギー資源工学
 4：エネルギー蓄積輸送工学
 半導体物性工学の基礎 (原留 美吉) 工 業 調 査 会
 CAD/CAM入門 (山田富士夫) 〃
 化学工学 1～3 (藤田, 大山, 大竹) 岩 波
 洗剤の科学 増補改訂 (今木 喬) ドメス 出 版
 生活学 6～8 (日本生活学会) 〃
 暮しの論理 (山本 松代) 〃
 エネルギー/戦争 (エイモリー, ロビン) 時 事 通 信 社
 物理工学実験 東京大学出版会
 8：高温・熱技術
 配管系の応力解析 (日本発条株式会社) 日 本 工 業 出 版
 材料力学と問題解法 (塩原 巖) 理 工 学 社
 製図要覧 新版 (栗田忠四郎) 学 術 文 献 出 版 会
 やさしい産業用ロボット読本 (川崎重工) 日 本 能 率 協 会
 標準工事歩掛要覧 改訂版
 (工事歩掛研究会) 経 済 調 査 会 出 版 部
 総合交通体系調査関係用語解説集 九州大学出版会
 ドキュメント・ダム開発 (森 薫樹) 三 一 書 房
 電気回路 (松元, 築地) 学 献 社
 制御理論とシステムへの応用
 (工藤 道夫) 〃
 TQC日本の知恵 (唐津 一) 日 科 技 連
 コンピューター測量計算法 (塚本 正文) 現 代 理 工 学 出 版

土木工学大系 彰 国 社
 5：連続体の力学 1
 現場技術者のための土と基礎シリーズ 土 質 工 学 会
 6：建設工事に伴う公害とその対策
 川に想う～世界の河川～ (安芸 皎一) 古 今 書 院
 検証ふるさとの水 (宇井 純) 亜 紀 書 房
 磯崎新十篠山紀信建築行脚 六 耀 社
 6：凍れる音楽
 GA Houses～世界の住宅～14 A. D. A. EDITA Tokyo
 住宅建築設計例集 建 築 資 料 研 究 社
 7：建築細部詳細：高須賀晋作品集 〃
 機械実験一般 増補版 産 業 図 書
 (東京都立大学工学部機械工学教室)
 工業英語 機械編 (金勝 格) 東 京 電 機 大 学 出 版 局
 機械部材の破損解析 (長岡 金吾) 工 学 図 書
 オイルレスベアリング (川崎 景民) ア グ ネ
 機械スケッチ (江沢, 三浦) パ ワ ー 社
 内燃機関講義 (吉田 毅) ア ー ス 社
 気化器の理論と実際 (吉田 隆) 鉄 道 日 本 社
 技術資料管路・ダクトの流体抵抗 日 本 機 械 学 会
 スカイラインに賭けた男たち (淀 義朗) 創 隆 社
 写真集 日本の航空史上 朝 日 新 聞 社
 航空人列伝 (鈴木 五郎) 誠 文 図 書
 宇宙からの帰還 (立花 隆) 中 央 公 論 社
 通信工学要論 (橋村伊佐夫) 国 民 科 学 社
 電気通信概論 改訂版 (松前 重義) 東 海 大 学 出 版 会
 溶接技術者のための溶接ロボット教本
 (日野 孝良) 産 報 出 版
 金属表面工業全書 慎 書 店
 2：金属表面加工理論
 工業英語読本 (川口寅之輔) 〃
 電気法規および電気施設管理
 (松浦, 古阪) コ ロ ナ 社
 はかる道具のおはなし (小泉袈裟勝) 日 本 規 格 協 会
 電気設備技術基準の用語解説
 (古川 英夫) オ ー ム 社
 現場で役立つ電気・安全読本
 (鈴木 正一) 〃
 だれにもわかる電気安全入門
 (内藤 勝次) 〃
 鉄骨造入門 (伊藤 高光) 彰 国 社
 現代木造住宅のディテール (井場, 菊池) 〃
 木造住宅 丸 善
 2：断熱化の手引き



電気法規および電気施設管理

(瀬川 正男) 電気書院
 センサのはなし (山崎 弘郎) 日刊工業新聞社
 ロータリーエンジンの構造と整備 (横田 順方) ♪
 デジタル I C無接点シーケンス制御入門 (岩本, 浅野) 啓学出版
 おもしろいレーザー光 (シュナイダー) 東京図書
 解説シーケンス制御の基礎 (種田 導博) 東京電機大学出版局
 脳とコンピューター (品川 嘉也) 中央公論社
 新モダンタイムス 毎日新聞社
 文科系にもわかる先端技術情報 (青柳 全) 実業之日本社

独創力の秘密 (中松 義郎) P H P 研究所
 工業英語へのアプローチ 日本工業英語協会
 21世紀への照準 (仙波 正) 新技術社
 建築とポップ・カルチャー(レイナー バンハム) 鹿島出版会
 車をすいすい走らす法 (樋口 健治) 経 済 界
 マニアの音響学 (橋本 文夫) 誠文堂新光社
 建築技術選書 学 芸 出 版
 25:建物の断熱と防湿 (宮野 秋彦) ♪
 35:高層集合住宅の維持管理 (福嶋 孝之)
 36:日本壁 (山田 幸一)

> 6 産 業 <

地域開発と水資源 (千葉太一郎) 理工評論出版
 コロナシリーズ コロナ社
 17:長さの単位 (増井 敏郎)

> 7 芸 術 <

日本古寺美術全集 集 英 社
 22:京の五山
 岩波美術館 岩 波
 テーマ館 1:ひとの顔
 歴史館 10:バロックとロココ

> 8 語 学 <

英語学論説資料 第15号第3, 4分冊 論説資料保存会
 英語の落とし穴 (篠田 義明) 朝日アングロニュース社

> 9 文 学 <

志賀直哉全集 1~7 (志賀 直哉) 岩 波
 古典を読む 7:歎異抄 (杉浦 明平) ♪
 いつの日か国に帰らん (松原 一枝) 講 談 社
 五木寛之小説全集 (五木 寛之) ♪
 24:夜のドン・キホーテ
 25:にっぽん退屈党
 26:風の柩
 27:変奏曲
 28:深夜美術館
 29:凍河
 30:戒厳令の夜 上
 31: ♪ 下
 32:日ノ影村の一族
 33:燃える秋
 34:鳥の歌 上
 35: ♪ 下
 36:優しい狼たち
 別巻:五木寛之論

現代家族 (黒岩 重吾) 中央公論社
 旅立とう、いま (吉森こずえ) 日本放送出版協会
 完訳日本の古典 小 学 館

1:古事記
 15:源氏物語 2
 49:御伽草子集
 57:雨月物語・春雨物語
 58:蕪村集・一茶集

筆の運びは拙いが (渡辺 奎二) 越 書 房
 真説 忠臣蔵 (森村 誠一) 新 潮 社
 赤露の人質日記 (エリセーエフ) 中央公論社
 エリセーエフの生涯 (倉田 保雄) ♪
 積木くずし (穂積 隆信) 桐 原 書 店
 己れ無き日々 岡山県退職婦人教職員組合

岩波新書
 232:GHQ (竹前 栄治)
 233:計算機歴史物語 (内山 昭)
 234:フレームアップ (小此木真三郎)
 235:中国の妖怪 (中野美代子)
 236:医者と患者と病院と(砂原 茂一)
 237:花火~火の芸術~ (小勝 郷右)
 238:ミツバチの世界 (坂上 昭一)



- 239：転換期の中国 (辻 康吾)
- 240：地震と建築 (大崎 順彦)
- 241：日本的自我 (南 博)
- 242：森の不思議 (神山 恵三)
- 243：嵐の道を探る (富岡 儀八)
- 244：モーツァルトを聴く(海老沢 敏)
- 245：ヨーロッパ歳時記 (植田 重雄)
- 246：私の読書 (「図書」編集部)

岩波ジュニア新書

- 62：無限への一步 (志賀 浩二)
- 63：ハンドブック スポーツの記録 (前田 新生)
- 64：歴史を動かした発明 (平田 寛)
- 65：わたしたちと世界 (武田 清子)
- 66：南極情報101 (神沼 克伊)
- 67：英文解釈の基礎 (西田 実)

カラーボックス

- 607：日本の私鉄 ㉗ 山陽電鉄
- 608：コーヒーの店・大阪
- 609：健康食百科 ㉘ しょうゆクッキング
- 610：日本の切手Ⅲ
- 611：大阪ミナミの味
- 612：毒のある植物
- 613：都電荒川線各駅停車
- 614：京都味の宿
- 615：子どもの絵～成長をみつめて～
- 616：秋植え球根
- 617：東京わか町～秋冬編～
- 618：大阪城ガイド
- 619：日本の私鉄 ㉘ 中国・四国・九州
- 620：新しいばら
- 621：戦国合戦図
- 622：近鉄Ⅱ
- 623：観葉植物の魅力
- 624：大阪キタの味

建設白書 昭和58年版

経済白書

日本国勢図会 1983年版

就職関係図書

- 主要会社機械就職試験問題対策と解答 (増補版)
- 中級公務員試験合格情報 59年度版
- 大学生用面接試験 59年度版
- 大学卒常識問題 '84
- 大学卒面接作文 '84

- 私鉄・国鉄職員試験問題傾向と対策 59年度版
- 公務員採用試験全書 1983
- 最新電々公社員試験 '84
- これだけは知っておきたい機械の基礎問題
- 就職試験機械工学・金属工学科 59年度版
- 理工学部就職試験 59年度版
- 大学・短大卒程度教養一般知識 59年度版
- 大学・短大卒程度教養一般知能 59年度版
- 大学生の就職英語これだけはやっとうこう 59年版
- 精解中級国家公務員試験傾向と対策 59年度版
- 国家試験資格試験全書 1983
- 合格対策一級建築士受験講座
- 学科1～学科4, 設計製図 '83
- 官公庁主要会社
- 建築就職試験問題解答集
- 土木就職試験問題解答集
- 就職試験建築学・土木工学科就職試験 59年度版
- 就職試験電気・電子・通信工学科就職試験 59年度版

寄贈図書

寄贈者	書名(著者)
広島女子大学	広島女子大学地域研究叢書 I～V
工学出版	土木法規の基礎 (岸本, 天津)
サンケイ出版	裸の王様ニッポン (吉田 忠雄)

